

平成 28 (2016) 年度 十七世紀英文学会

各支部活動報告

【東北支部】

2016年7月23日	青木 愛美	corona という形式—Donne、Sidney、Mary Wroth
2017年1月28日	柴田 尚子	初期近代期のイングランドにおける極東アジア表象
2017年3月4日	佐々木和貴	シェイクスピアと音楽：ヘンリー・パーセルを中心に
2017年3月4日	川崎 和基	John Milton と William Walwyn：宗教的寛容をめぐって

2016年7月23日	宮本正秀	トマス・ブラウンの遺言—『キリスト教徒のモラル集』について
2016年12月10日	円城ゆり	<i>The Faerie Leveller</i> (1648) および <i>The Faerie King</i> (c.1650) における『妖精の女王』の王党派的受容
2017年2月11日	神山さふみ	『ジュリアス・シーザー』における民衆
2017年2月11日	辻川美和	ジョン・フレッチャーの劇における癒しの歌

【東京支部】

【関西支部】

2016年7月9日	川島 伸博	ミルトンとオーウェルの『動物農場』
2016年9月3日	丹羽 佐紀	<i>The Tempest</i> における対立とは —和解との関連性において—
2016年12月10日	久野 幸子	イングランド国教会における説教を巡る対立 —ジョン・ダンとウィリアム・ロードー
2017年3月19日	山本 真司	テキストとイメージ、モノの饗宴：17世紀前半期 英国バンケット・トレンチャーの文学的社会的効用

各支部活動報告発表要旨

【東北支部】

corona という形式—Donne、Sidney、Mary Wroth

青木 愛美

本発表では、Lady Mary Wroth が先へ進む構造を持つソネット連作内に円を描いて先へ進むことを中断させる *corona* という形式を使用したことを踏まえ、*corona* を用いて詩作を試みた John Donne、Wroth に影響を与えたと考えられる Sir Philip Sidney や Robert Sidney、そして Lady Mary Wroth 自身のそれぞれの *corona* を検討し、*corona* を使って詩を書いた意図を確認した。

John Donne は *corona* の構造を用いてソネットを書いたが、それは *corona* の別名である *crown* という名のとおり、神へ捧げる冠のような役割を果たすものであった。そして円環のイメージは *corona* の構造ばかりでなく詩中に円を象徴する単語を取り入れることでも強調されている。当時完全性の象徴であった円を使うことが、神を賛美するために相応しいと Donne は考えていた。完全な *corona* を作り上げた Donne とは異なり、Sir Philip Sidney は *corona* の後ろに余分な数行を加えることで円の成立を妨げている。これには「悲しみ」を取り扱った *corona* に逃げ道を作ることで「悲しみ」から逃れる術を見出そうとする意図があると考えられる。Philip Sidney は円環を描ききってから敢えて崩したが、弟の Robert Sidney は *corona* を途中でやめてしまい、未完成で終わっている。Robert Sidney は円の「完全性」という性質と真逆の「儂さ」という性質に気づき、円を作り上げないことでむしろ「儂さ」から逃れている可能性もある。Robert Sidney の娘である Mary Wroth は Donne のようにソネットを用いて連作内で *corona* を完成させ、Venus へ捧げる冠を作り上げているが、その一方で抜け出せない迷路のような構造になっている。悲しみから逃れる道を作り上げた Philip Sidney とも、儂さから脱却した Robert Sidney とも異なり、Wroth は *corona* を独自の方法で完成させている。

以上を踏まえ、*corona* を用いた詩人のそれぞれの意図に加え、Sidney 家の詩人たちに倣って *corona* を書き上げたと考えられる Mary Wroth の模倣性と独自性の両方を見出すことができた。

参考文献

Croft, P. J. (ed.), *The Poems of Robert Sidney*. Oxford: Oxford UP, 1984.

Kinney, Clare R. *Ashgate Critical Essays on Women Writers in England, 1550-1700: Volume 4*. Farnham, Surrey: Ashgate, 2009.

Miller, Naomi J. "Rewriting Lyric Fictions: The Role of the Lady in Lady Mary Wroth's *Pamphilia to*

Amphilanthus.” in *Ashgate Critical Essays on Women Writers in England, 1550-1700: Volume 4*, edited by Clare R. Kinney (Ashgate, 2009) 45-60.

Moore, Mary. “The Labyrinth as Style in *Pamphilia to Amphilanthus.*” in *Ashgate Critical Essays on Women Writers in England, 1550-1700: Volume 4*, edited by Clare R. Kinney (Ashgate, 2009) 62-77.

Parker, Tom W. N. *Proportional Form in the Sonnets of the Sidney Circle*. Oxford: Oxford UP, 1998.

Roberts, J. A. (ed.), *The Poems of Lady Mary Wroth*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1983.

Sidney, Philip. *The Countess of Pembroke’s Arcadia (The Old Arcadia)*. Ed. Katherine Duncan-Jones. Oxford: Oxford UP, 1985.

Smith, A. J. (ed.), *John Donne: The Complete English Poems*. London: Penguin Classics, 1971.

Wroth, Mary. *Pamphilia to Amphilanthus*. Oxford: Benediction Classics, 2009.

----- *Lady Mary Wroth: Poems. A Modernized Edition*. Ed. R. E. Pritchard. Edinburgh: Edinburgh UP, 2010.

ニコルソン, M. H. 『円環の破壊』 (みすず書房、1999)

初期近代期のイングランドにおける極東アジア表象

柴田 尚子

16世紀半ばからの大航海時代において宣教師や貿易商らが持ち帰った報告書がヨーロッパ中で様々な言語に翻訳され流通するようになり、更に、印刷技術の発達によって、再版しやすくなったこと、また、イングランドでは特に他国よりも旅行本の消費、収集、出版が行われたことで、中国や日本のような極東の国々の情報までが入るようになった。17世紀半ばには、漆器や陶器等の極東からの珍品が輸入されると、極東アジアの国を文化水準が高く優れた道德観を持ち合わせた国と認識した。その中で、名誉革命の頃からジャパニング“japanning”と呼ばれる家具が流行しだす。これは日本や中国で作られた漆塗りの家具を模倣してイングランド国内でイギリス人好みに作られた家具を指す。

極東アジアの流行が見え始めた頃、Elkanah Settleは*The Conquest of China, by Tartars* (1675)をCharles IIの前で上演する。ヨーロッパでも広く知られた中国明王朝の滅亡を扱ったこの劇は、史実と同様に、侵略したタタール(満州族)が中国の制度や習慣を受け継ぎ、自らの王朝を建国する。王位継承問題に揺れるイングランドと重ねたと言われるこの劇は、王朝が崩壊した後も安寧が続くことを暗にイングランドの観客に伝えている。

一方、日本については、日本や日本人を扱う劇はないものの、日本人は「従順で礼儀正しい」と評されていた。史実では日本人がきっかけとなるアンボイナ事件もJohn Drydenの*Amboyna* (1673)には登場しない。

極東の情報が入り始めたばかりの 17 世紀イングランドにおいて、中国や日本はまだ未知なる国であり、漆器や陶器、ジャパニングと呼ばれる家具から連想された想像上の作り上げられた国であったと示した。

主要参考文献

- Chang, Dongshin. *Representing China on the Historical London Stage: From Orientalism to Intercultural Performance (Routledge Advances in Theatre & Performance Studies)*. London: Routledge, 2015.
- Dalporto, Jennie. “The Succession Crisis and Elkanah Settle’s *The Conquest of China by the Tartars*.” *The Eighteenth Century: Theory and Interpretation* 45 (2004), 131-46.
- Dearing, Vinton A., ed. *The Works of John Dryden, Vol. 12: Plays; Amboyna; The State of Innocence; Aureng-Zebe*. Berkeley: University of California Press, 1994.
- Robert, Markley. *The Far East and The English Imagination, 1600-1730*. Cambridge: Cambridge University Press, 2006.
- Settle, Elkanah. *The Conquest of China, by the Tartars. A tragedy [in five acts and in verse]*. London: British Library, 1676.
- Thorpe, Asheley. *Performing China on the London Stage: Chinese Opera and Global Power, 1759–2008*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2016.
- Wylles, Richard. “Of the Island Giapan, and other little Isles in the East Ocean.” *The History of Travayle in the East and West Indies, and other Countreys lying eyther way towards the fruitfull and ryche Moluccaes, as Muscovia, Persia, Arabia, Syria, Egypt, Ethiopia, Guinea, China in Cathayo, and Giapan: with a Discourse of the North West Passage*. Ed. and Trans. Richard Eden. London, 1557. Rept. in *England and Japan: The First Known Account of Japan in English extracted from the “History of Travayle.”* Ed. M. Paske-Smith. Kobe: J.L.Thompson and Co., 1928.
- Yang, Chi-Ming. *Performing China: Virtue, Commerce, and Orientalism in Eighteenth-Century England, 1660-1760*. Baltimore: The John Hopkins University Press, 2011.
- 鈴木 裕子「イギリス化する「中国風」：名誉革命から 18 世紀半ばのイギリス家具に見るシノワズリ」〈http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/55876/1/NCK_17_003.pdf〉
- デメール, ヴォルター 「近世ヨーロッパにおける日本人と中国人のイメージ：身体的特徴・習俗・技術—極東の文化へのさまざまなアプローチの比較—」中村武司 訳 〈http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/vol_2/pdf/vol_2_article03.pdf〉
- 東田 雅博『シノワズリーか、ジャポニズムか—西洋世界に与えた衝撃—』東京：中央公論新社、2015.

シェイクスピアと音楽：ヘンリー・パーセルを中心に

佐々木 和貴

本発表では、前半はシェイクスピア自身がどのように同時代の音楽を取り入れたのか、そのテクニクを論じた。また後半ではシェイクスピアとの関わりという切り口から、王政復古演劇の中のヘンリー・パーセル（1659?-1695）について、話題提供を試みた。

Part 1 シェイクスピアの劇音楽

まず、同時代に流行していた曲 “Green sleeves” と “Fortune my foe” が芝居の台詞にとりこまれている『ウインザーの陽気な女房たち』（1602）をとりあげた。そしてシェイクスピアが、元歌を観客が知っていることを前提に、その歌詞をアレンジした台詞をフォルスタッフに言わせ、巧みに滑稽な効果を引き出していることを示した。

次は『オセロー』（1604）でデズデモーナが歌う、これまた当時有名な “Willow song” を取り上げた。こちらは、歌の主人公のジェンダーを変え、しかも本来はかなり長い歌を冒頭のみにとどめることで、シェイクスピアがヒロインの運命を暗示する「技の冴え」を論じた。

Part 2 シェイクスピアとパーセル

まず、『テンペスト』の劇中歌「可愛い人よ」(Dear, pretty youth)をとりあげた。『テンペスト』といっても、ドライデンとダヴェナントによる『テンペスト、あるいは魔法の島』(*The Tempest, or the Enchanted Island*) (1667) の方である。しかもこの歌は、トマス・シャドウエルがセミ・オペラ風にさらに改作したヴァージョン(1674)が1695年再演された折、パーセルが提供したものであるため、結果的には、王政復古期のシェイクスピア改作の具体例を提示することにもなった。

次に、パーセルのセミ・オペラの傑作『妖精の女王』から「嘆きの歌」(O let me weep)をとりあげた。そして、パーセルがこの『真夏の夜の夢』の翻案劇をはじめ、実はこの頃、様々なタイプの芝居に多数の曲を提供し、深く当時の演劇界と関わっていたことを示した。そしてさらに、名優トマス・ベタトン、踊りの振付け師ジョサイアス・プリーストと組んでパーセルが確立した、このセミ・オペラというジャンルを再考することで、王政復古演劇に新たな光があたる可能性を示唆した。

Selected Bibliography

- Burden, Michael ed., *Henry Purcell's Opera: The Complete Texts*. Oxford: Oxford University Press, 2000.
- Evelyn, John. *The Diary of John Evelyn*. Ed. E.S. de Beer. 6 vols. Oxford: Oxford University Press, 1955.
- Lenep, William Van ed., *The London Stage, 1660-1800, Part I: 1660-1700*, Carbondale: Southern Illinois University Press, 1965.
- Price, A. Curtis. *Henry Purcell and the London Stage*. Cambridge: Cambridge University Press, 1984.
- Shadwell, Thomas. *The Tempest, or the Enchanted Island* in Vol. II of *The Complete Works of Thomas*

Shadwell. Ed. Montague Summers. New York: Benjamin Blom, 1927.

Shakespeare, William. *The Oxford Shakespeare: The Merry Wives of Windsor*. Ed. T.W. Craik. Oxford: Oxford University Press, 1989.

_____. *The Oxford Shakespeare: Othello*. Ed. Michael Neill. Oxford: Oxford University Press, 2006.

English Broadside Ballad Archive <<https://ebba.english.ucsb.edu/>>

John Milton と William Walwyn : 宗教的寛容をめぐる

川崎 和基

事前検閲制度の機能の低下により 17 世紀イングランド内乱期 (1642–51) 初期に急進的思想が噴出しすることになった。ジョン・ミルトンはこの時期、1643 年に *The Doctrine and Discipline of Divorce* を出版し、理性に基づかない結婚は無効だとして、離婚の正当性を主張し、さらに 1644 年に *Areopagitica* を出版し、言論の自由を説いた。ミルトンのこの一連の出版は、長老派からの攻撃の的となり、長老派の聖職者であったトマス・エドワーズからは特にその著書 *Gangraena* (1646) で攻撃されることとなる。

エドワーズの攻撃対象となったものは、ミルトンのみならず、再洗礼派、反律法主義、アルミニウス主義などといった彼が主張する異端思想やその信奉者達であった。エドワーズが攻撃する異端思想の数は、およそ 300 にもおよび、さらに実名を挙げて糾弾する数は 138 人になった。*Gangraena* の出版後すぐに、20 のパンフレットが直接エドワーズに対して反論をし、さらに多数の彼の敵対者がエドワーズへの非難を出版物のなかで言及していることから、*Gangraena* の反響が大きかった証左になる。この出版物による攻防すなわちパンフレットウォーで、エドワーズは 138 人を相手にするほどその規模は大規模なものとなった。

エドワーズが異端視する者に対する攻撃の最大の理由は、彼らが、宗教的寛容の名の下で誤謬を犯していると考えていたからであった。彼はすべての異端者を、宗教的寛容の乱用者と認識し、特に、ジョン・グッドウィン、ウィリアム・ウォルウィン、ジョン・ソルトマーシュをその乱用者として攻撃し、ミルトンもその対象となった。

本発表では、宗教的寛容を巡るエドワーズとミルトンならびにウォルウィンとの攻防戦を、エドワーズの *Gangraena*、ミルトンの *On the New Forcers of Conscience under the Long Parliament* (1646) ならびにウォルウィンの *A whisper in the Eare of Master Thomas Edwards* (1645/46) を中心に検討することで、1640 年代の内乱期パンフレットウォーの一端を提示した。

Selected Bibliography

- Achinstein, Sharon and Elizabeth Sauer. Eds. *Milton and Toleration*. New York: Oxford UP, 2007
- Campbell, Gordon and Thomas N. Corns. *John Milton: Life, Work, and Thought*. Oxford: Oxford UP, 2008.
- Coffey, John. *John Goodwin and the Puritan Revolution: Religion and Intellectual Change in Seventeenth-Century England*. Woodbridge: Boydell P, 2006.
- Edwards, Thomas. *Gangraena Part 1 and Part 2; A Catalogue of Many of the Errours, Blasphemies and Practices of the Sectaries of the time, with some observations upon them*. London, 1646.
- _____. *Gangraena Part 3; A New and further Discovery of The Errors, Heresies, Blasphemies and Proceedings of the Sectaries of these times*. London, 1646.
- Hill, Christopher. "Radical Prose in 17th Century England: From Marprelate to the Levellers." *Essays in Criticism* 13. 2 (1982): 95-118.
- Hughes, Ann. *Gangraena and the Struggle for the English Revolution*. Oxford: Oxford UP, 2004.
- Lowestein, David and James Grantham Turner. Eds. *Politics, Poetics, and Hermeneutics in Milton's Prose*. New York: Cambridge UP, 1990.
- Sauer, Elizabeth. *Milton, Toleration, and Nationhood*. New York: Cambridge UP 2014.
- Smith, Nigel. *Perfection Proclaimed: Language And Literature In English Radical Religion 1640–1660*. Oxford: Clarendon P, 1989.
- Walwy, William. *A Whisper in the Eare of Mr. Thomas Edwards, Minister*. London 1646.
- _____. *A Parable, or Consultation of Physitians upon Master Edwards* 1646

【東京支部】

トマス・ブラウンの遺言—『キリスト教徒のモラル集』について

宮本正秀

本発表では、17世紀の医師トマス・ブラウン (Thomas Browne, 1605-82) の著作『ある友人への手紙』 (*A Letter to a Friend*, 1656; pub. post. 1690) と『キリスト教徒のモラル集』 (*Christian Morals*, 1670s; pub. post. 1716) を、15世紀から17世紀にかけてヨーロッパで広く流通した『死ぬための技法』 (*Ars Moriendi*) と称されるテクスト群の系譜中に位置づけ、ブラウンの死生観について考察した。17世紀において通常は、医師は患者の臨終に立ち会わないものであったが、『ある友人への手紙』においてブラウンは、患者の臨終を克明に記述している。患者の臨終に立ち会うという経験は、彼の精神において熟成の時を過ごし、ブラウンの文筆活動の集大成ともいえるべき『キリスト教徒のモラル集』に結実したのである。

参考文献

- Atkinson, David William (ed.) *The English Ars Moriendi (Renaissance and Baroque: Studies and Texts 5)* New York: Peter Lang, 1992.
- Ariès, Philippe. *The Hour of Our Death: The Classic History of Western Attitudes Toward Death over the Last One Thousand Years*. Tr. Helen Weaver. 1981; New York: Vintage Books, 2008.
- 〔邦訳〕 フィリップ・アリエス 『死を前にした人間』 成瀬駒男訳、みすず書房、1993年、2013年
- Beaty, Nancy Lee. *The Craft of Dying: The Literary Tradition of the Ars Moriendi in England*. (Yale Studies in English, 175) New Haven & London: Yale UP, 1977.
- Browne, Sir Thomas. *21st-Century Oxford Authors: Thomas Browne*. Ed. Kevin Killeen. Oxford: Oxford UP, 2014.
- . *Religio Medici and Other Works*. Ed. L. C. Martin. Oxford: Clarendon Pr., 1964.
- . *The Works of Sir Thomas Browne*. 4 vols. Ed. Geoffrey Keynes. London: Faber & Faber, 1968.
- Cressy, David. *Birth, Marriage, and Death: Ritual, Religion, and the Life-Cycle in Tudor and Stuart England*. 1997; 1999; Oxford: Oxford UP, 2010.
- Houlbrooke, Ralph. *Death, Religion and the Family in England 1480-1750 (Oxford Studies in Social History)*. 1998. Oxford: Clarendon Pr., 2006.

Huntley, Frank Livingstone. *Sir Thomas Browne: A Biographical and Critical Study*. Michigan: U of Michigan Pr., 1962; Ann Arbor Paperbacks, 1968.

Wear, Andrew. "Making Sense of Health and the Environment in Early Modern England." *Medicine in Society: Historical Essays*. Ed. Andrew Wear. Cambridge: Cambridge U P, 1992; 1996.

The Faerie Leveller (1648) および *The Faerie King* (c.1650) における
『妖精の女王』の王党派的受容

円浄ゆり

本発表では、スペンサー研究で論じられることの少ない王党派詩人 Samuel Sheppard による『妖精の女王』の翻案作品二点を取り上げ、「群衆」と「君主」の表象の相違について両作品の比較を試みた。*The Faerie Leveller* は 1648 年に匿名出版されたプロパガンダで、『妖精の女王』第五巻第二篇の稱を持った巨人の挿話をほぼそのまま引用している。序文では巨人がクロムウェルと議会軍から成るリヴァイアサンの怪物と解され、その巨人を打倒する英雄がチャールズ一世だと説明される。スペンサーの「群衆」は口を利かないが、Sheppard は平等の権利を主張する不遜な巨人として「群衆」を捉えている。「君主」は理想化され、来るべき王党派の勝利を描いた預言詩として『妖精の女王』が受容されている。

チャールズ処刑後に執筆された *The Faerie King* (未出版) では、愚かな助言者たちと王自身の判断ミスにより国が滅亡していく様がロマンス風に描かれる。「群衆」は暴政により正義が損なわれることを懸念する一方、「君主」は暴徒の反乱を恐れる姿が描かれる。やや議会派擁護の描写に変化しつつも、王は「テニスボール」のごとく「運命」に翻弄された憐れむべき犠牲者であることが強調され、『妖精の女王』は懐古的なロマンスとして受容されている。

Selected Bibliography

Primary Sources

Sheppard, Samuel. *The Faerie Leveller: or, King Charles His Leveller Descried and Deciphered in Queene Elizabeths Days*. N.p., 1648. *Early English Books Online*. Web. 10 November 2016.

<http://gateway.proquest.com/openurl?ctx_ver=Z39.88-2003&res_id=xri:eebo&rft_id=xri:eebo:citation:99872292>

---. *The Faerie King (c. 1650)*. Ed. P. J. Klemp. Elizabethan & Renaissance Studies. Salzburg:

Institut für Anglistik und Amerikanistik, Universität Salzburg, 1984. Print.

Spenser, Edmund. *The Faerie Queene*. Ed. A. C. Hamilton. Text ed. Hiroshi Yamashita and Toshiyuki Suzuki. Rev. 2nd ed. Harlow: Longman-Pearson Education, 2007. Print.

Secondary Sources

King, John N. "Notes and Documents: *The Faerie Leveller*: A 1648 Royalist Reading of *The Faerie Queene*, V.ii.29-54." *Huntington Library Quarterly* 48 (1985): 297-308. Print.

Nevitt, Marcus. "Sing Heavenly News: Journalism and Poetic Authority in Samuel Sheppard's *The Faerie King* (c. 1654)." *Studies in Philology* 109 (2012): 496-518. Print.

Nicosia, Marissa. "Reading Spenser in 1648: Prophecy and History in Samuel Sheppard's *Faerie Leveller*." *Modern Philology* 114 (2016): 286-309. Print.

Tranter, Kirsten. "Samuel Sheppard's *Faerie King* and the Fragmentation of Royalist Epic." *Studies in English Literature, 1500-1900* 49 (2009): 87-103. Print.

『ジュリアス・シーザー』における民衆

神山さふみ

Shakespeare の *Julius Caesar* における Brutus の失脚の根本的要因は、〈民衆〉を味方につけることができなかったことにある。本発表では、Forum Scene の Brutus と Antony の演説に焦点をあて、当時の政治的演劇的なコンテクストから Shakespeare の描く〈民衆〉像について考察した。

まず、『ヘンリー六世・第二部』の Cade Scene に登場する〈民衆〉—リテラシーを持たない〈民衆〉—が後続の Shakespeare 劇の〈民衆〉のプロトタイプであるとする研究者らの見解に基づいて、*Julius Caesar* に登場するローマの民衆が Shakespeare 劇の〈民衆〉のヴァリエーションであることを明らかにした。

次に Forum Scene の演説において、Brutus が想定する民衆は、ニッコロ・マキアヴェッリの『論叢』に記述される「王制に反対し祖国を愛し公共善のために心血を注いで古代共和制ローマの発展を支えた有徳(virtue)の民」のようであり、愚かで滑稽な〈民衆〉とは隔たりがあることを論じた。視点を変えると〈民衆〉は、理想主義の Brutus や劇外のイングランドの共和主義者を揶揄している、と見ることもできた。

他方、〈民衆〉の心理と可操作性を熟知する Antony は、「内乱を焚き付ける」という目的のためには手段を選ばず二枚舌を使い、運命の風向きと事態の変化に即応する変幻自在の心構えを持ち、『君主論』通りの政治家を劇中劇の中で演じていることを確認した。〈民衆〉は王制派を支持する

暴徒となり、共和制ローマは幕を閉じる。

Forum Scene は、王も神もない世界で〈民衆〉が政治をどのように判断するのか、そして〈民衆〉が力を持つとどうなるのか、という実験を Shakespeare が劇中で行ったものだと考えられる。Shakespeare 劇の〈民衆〉は、生活を良くしたい、平等になりたいと願いながら貴族や政治家に扇動され、生命までも捨ててしまう 50 年後のイングランドの民衆を予知していたと言えるだろう。

Selected Bibliography

- Brown, John Russel., and Bernard Harris, eds. *Early Shakespeare. Stratford-Upon-Avon Studies 3*. London: Edward Arnold LTD, 1961.
- Bullough, Geoffrey. (ed.). *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. vol. 5. London: Routledge and Kegan Paul, 1977.
- Foakes, R. A. *Shakespeare and Violence*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Gillespie, Stuart. *Shakespeare's Book*. London: The Athlone Press, 2001.
- Hadfield, Andrew. *Shakespeare and Renaissance Politics*. London: Thomson Learning, 2004.
- . *Shakespeare and Republicanism*. Cambridge: Cambridge UP, 2005
- Hill, Christopher. *Change and Continuity in Seventeenth Century England*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1974.
- Machiavelli, Nicollò. *Discourses*. Trans. Leslie J. Walker. London: Routledge, 1991.
- . *The Prince*. Trans. George Bull. London: Penguin, 1961.
- Peltonen, Markku. *Classical Humanism and Republicanism in English Political Thought 1570-1640*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Plutarch. *The Lives of the Noble Grecians and Romans Compared together by that Grave Learned Philosopher and of Greeke into French by James Amyot...and out of French into Englishe by Thomas North*. London, 1579.
- Shakespeare, William. *Julius Caesar*. Ed. David Daniell. The Arden Shakespeare. London: Thomson Learning, 2010.
- . *King Henry VI Part 2*. Ed. Ronald Knowles. The Arden Shakespeare. London: Thomson Learning, 2001.
- Stirling, Brents. *Populace in Shakespeare*. New York: AMS Press 1949.
- エイザ・ブリッグズ『イングランド社会史』今井宏、中野春夫、中野香織訳、筑摩書房、2004.
- 末廣幹編『国家身体はアンドロイドの夢を見るか』ありな書房、2001.
- 富樫剛編『名誉革命とイギリス文学』春風社、2014.

ジョン・フレッチャーの劇における癒しの歌

辻川美和

シェイクスピアの共作者かつ後継者であったジョン・フレッチャーは、舞台上または文化的な約束事を利用してパロディや観客操作を行うことが多かった。本発表では、「癒しの歌」が登場する場面に焦点を当て、「音楽や歌に人の心や肉体を癒す力がある」という当時の一般的な考え方をフレッチャーが劇中でどう扱ったかを分析した。

肉体的、精神的な怪我やダメージを癒す歌が登場する場面では、シェイクスピアの『ペリクリーズ』などとは異なり、フレッチャーの劇では癒しはもたらされない。癒しの歌は、歌手の性的欲望を示したり、歌手自身の弱々しさを強調したり、癒しの対象の人物が癒されずに苦しむ様子を強調したりする。

恋や、恋に関連した狂気を癒す歌が登場する場面では、癒しがもたらされる1つの劇を除いて、癒しの歌は、その効果について観客の興味を引き付けたり、欺いたりするために使われる。*The Mad Lover* では、主人公を恋の狂気から癒すために3つの歌が歌われるが、癒しがもたらされたのかは明らかにはならず、観客はあやふやな状態におかれる。*The Lover's Progress* では、恋の三角関係の中で、恋を癒す歌を聞いた男が本当に恋から癒されたのがプロットの焦点となり、2回のどんでん返しがおもたらされる。

つまり、フレッチャー劇では、癒しの歌はほとんど癒しをもたらさない。フレッチャーは、観客の予測を裏切って驚かせたり、観客の興味をひき付けたり、観客を操作したりするために、癒しの歌のコンベンションを利用したのである。

主要参考文献

Austern, Linda Phyllis. *Music in English Children's Drama of the Later Renaissance*. Philadelphia: Gordon, 1992. Print.

---. "Musical Treatments for Lovesickness: The Early Modern Heritage" Holden 213-245.

Bowden, William. R. *The English Dramatic Lyric, 1603-42: A Study in Stuart Dramatic Technique*. London: Oxford UP, 1951. Print.

Double Falsehood or the Distressed Lovers. Ed. Brean Hammond. London: Methuen, 2010. Print.

The Dramatic Works in the Beaumont and Fletcher Canon. Gen. ed. Fredson Bowers. 10 vols. Cambridge: Cambridge UP, 1966-96. Print.

Gouk, Penelope. "Music, Melancholy, and Medical Spirits in Early Modern Thought." Peregrine Holden, ed. *Music as Medicine: The History of Music Therapy since Antiquity*.

Aldershot: Ashgate, 2000. Print. 173-94.

Henze, Catherine A. "Francis Beaumont and John Fletcher's tragicomedy as musical melodrama." *The Cambridge Companion to Shakespeare and Contemporary Dramatists*. Cambridge: Cambridge UP, 2012. Print.

---. "How Music Matters: Some Songs of Robert Johnson in the Plays of Beaumont and Fletcher." Henze, Catherine A. *Comparative Drama* 34.1 (Spring 2000): 1-32. ProQuest. 2014/5/27. Web.

---. "Unraveling Beaumont from Fletcher with music, misogyny, and masque. *Studies in English Literature, 1500-1900*. 44.2 (Spring 2004): p379. From Literature Resource Center. 2014/03/10. Web.

---. "Women's use of music to motivate erotic desire in the drama of Beaumont and Fletcher." 2001. *Journal of Musicological Research*, 20:2, 97-134. *Taylor & Francis Online*. 29 Aug 2014. Web.

Tsujikawa, Miwa. "Development of John Fletcher's Dramaturgical Techniques in Scenes with Women's Songs" 『ほらいずん』 第 48 号 (早稲田大学英米文学研究会) 2016 年 3 月 1-17. Print.

辻川美和 「ジョン・フレッチャーの劇における超自然的存在と歌—パロディと観客操作」 演劇博物館紀要『演劇研究』第 39 号 (早稲田大学坪内博士記念演劇博物館) 2016 年 57-74. Print.

---. 「ジョン・フレッチャーの劇における男装——観客操作の方法とコンベンションの利用法の変遷」 『ほらいずん』 第 46 号、早稲田大学英米文学研究会、2014 年 1-15. Print.

【関西支部】

ミルトンとオーウェルの『動物農場』

川島伸博

ジョージ・オーウェルの名作『動物農場』には、1945年の出版時に掲載されなかった幻の序文が存在する。反スターリニズムの色彩が明白なこの小説は、脱稿後もなかなか出版社が見つからなかったという経緯がある。「出版の自由」と名付けられたその幻の序文には、出版社の自主検閲に対するオーウェルの怒りと皮肉が満ち溢れている。そして、オーウェルはその序文の中で、わずか一行だけ、唐突にジョン・ミルトンの詩行を引用するのである。本発表は、この唐突な引用を手掛かりに、オーウェルとミルトンとの一筋縄ではいかない関係について考察し、『動物農場』の着想のひとつにミルトンの詩句があったという可能性について示した。

主要参考文献

- Crick, Bernard. *George Orwell: A Life*. Secker & Warburg, 1980.
- Crick, Bernard. "How the Essay Came to be Written" (*The Times Literary Supplement*, 1972.9.15).
- Davison, Peter. *The Lost Orwell*. Timewell Press, 2006.
- Forster, E. M. *The BBC Talks of E. M. Forster, 1929-1960: A Selected Edition*. Ed. Mary Largo, Linda K. Hughes, and Elizabeth MacLeod Wall. University of Missouri Press, 2008.
- Milton, John. *The Poetical Works of John Milton*. Ed. W. H. D. Rouse. J. M. Dent & Sons, Ltd., 1909.
- Orwell, George. *A Clergyman's Daughter* (*The Complete Works of George Orwell. III*. Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1987).
- Orwell, George. *Animal Farm* (*The Complete Works of George Orwell. VIII*. Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1987).
- Orwell, George. "As I Please, 50" (*The Complete Works of George Orwell. XVI*. Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1998).
- Orwell, George. "Inscription, 'E. A. Blair K. S.'" (*The Complete Works of George Orwell. X*. Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1998).
- Orwell, George. "Introduction to British Pamphleteers, Volume I, edited by George Orwell and Reginald Reynolds" (*The Complete Works of George Orwell. XIX*. Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1998).
- Orwell, George. *Keeping the Aspidistra Flying* (*The Complete Works of George Orwell. IV*. Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1987).
- Orwell, George. "King Charles II" (*The Complete Works of George Orwell. X*. Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1998).
- Orwell, George. *Nineteen Eighteen Four* (*The Complete Works of George Orwell. IX*. Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1987).
- Orwell, George. *Orwell: The War Broadcast*. Ed. W. J. West. BBC, 1985.
- Orwell, George. "Review of *English Diaries of the Nineteenth Century*, edited by James Aitken" (*The Complete Works of George Orwell. XVI*. Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1998).
- Orwell, George. "Review of *Milton: Man and Thinker* by Denis Saurat" (*The Complete Works of George Orwell. XVI*. Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1998).

- Orwell, George. “Review of Freedom of Expression, edited by Hermon Ould” (*The Complete Works of George Orwell. XVII.* Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1998).
- Orwell, George. “Review of *The Black Tents of Arabia* by Carl R. Raswan; *Secret Africa* by Lawrence Green; *In Lightest Africa and Darker Europe* by P. B. Williams; *Going Native* by Eric Muspratt; *Aerial Odyssey* by E. Alexander Powell” (*The Complete Works of George Orwell. X.* Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1998).
- Orwell, George. “The Freedom of the Press” (*The Complete Works of George Orwell. VIII.* Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1987).
- Orwell, George. “The Prevention of Literature” (*The Complete Works of George Orwell. XVII.* Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1998).
- Orwell, George. “Voice, 6: A Magazine Programme” (*The Complete Works of George Orwell. XIV.* Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1998).
- Orwell, George. “Why I Write” (*The Complete Works of George Orwell. XVIII.* Ed. Peter Davison. Secker & Warburg, 1998).
- Ould, Hermon. (ed.) *Freedom of Expression.* Hutchinson International Authors, Ltd., 1945.

The Tempest における対立とは — 和解との関連性において —

丹羽 佐紀

The Tempest (1611) は、Henry VIII (1613)と並んでシェイクスピア晩年の作であること、また魔法を操り采配を振るうプロスペローが、最終的に魔法を捨て、自分をミラノ公国から追放した人々を許すこと、さらに他のロマンス劇と同じように、和解はやがてファーディナンドとミランダの結婚へつながることから、批評史においては、劇作家シェイクスピアが晩年に到達した人生観を如実に示すロマンス劇として長く位置づけられてきた。また孤島という特殊空間に当時のイングランドの歴史的・地理的な表象を読み取り、植民地主義政策の観点から劇を解釈する試みも多くなされてきた。いずれも共通しているのは、この劇における最後の場面が、プロスペローと彼を取り巻く登場人物たちの、ある一つの段階から別の段階への大きな転換点として位置づけられることである。プロスペローが魔法の衣を脱ぎ捨てる行為は、限られた空間からの登場人物たちの解放を象徴するようにも見える。

しかしこの劇には同時に、舞台上のみならず、各場面の背後で常に対立や諍いのテーマが顔を覗かせている。ここで述べる対立とは、領土の覇権争いを中心とする政治的な陰謀、またそれをめぐって登場人物たちが諍いを起こす不穏要因を指す。劇中で繰り返し表出される、登場人物たちの様々な対立関係の構図は、この劇のプロットが必ずしも単純に和解へ向かって集約されているとは言えないことを観客に気づかせる。それぞれの対立の場面が、プロスペローの魔法の杖の一振りによって円満に解決するべくプロットに組み込まれているのではないとすれば、この劇における対立と和解はどのような関係性において描かれているのか。発表では特に、ファーディナンドとミランダがチェスゲームをする場面に潜む戦いのイメージ、エアリエルが手に入れる自由の不確かさに注目し、それらが、対立と和解が果てしなく繰り返される劇的構造を垣間見せる表象として機能することを明らかにした。

主要参考文献

- Armitage, David, Coral Condren, and Andrew Fitzmaurice, eds. *Shakespeare and Early Modern Political Thought*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Baker, Christopher. *Religion in the Age of Shakespeare*. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 2007.
- Bellany, Alastair. "The Court". *Thomas Middleton in Context*. Ed. Suzanne Gossett. Cambridge: CUP, 2011. 117-125.
- . *The Politics of Court Scandal in Early Modern England: News Culture and the Overbury Affair, 1603-1660*. Cambridge: CUP, 2002.
- Berry, Philippa. *Of Chastity and Power: Elizabethan Literature and the Unmarried Queen*. London: Routledge, 1994.
- Bullough, Geoffrey, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol. VIII. London: Routledge & Kegan Paul, 1975.
- . *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol. IV. London: Routledge & Kegan Paul, 1962.
- Clopper, Lawrence M. *Drama, Play, And Game: English Festive Culture in the Medieval and Early Modern Period*. Chicago: The University of Chicago Press, 2001.
- Cressy, David, and Lori Anne Ferrell. *Religion and Society in Early Modern England: A Sourcebook — Second Edition*. New York: Routledge, 2005.
- Curran, Kevin. *Marriage, Performance, and Politics at the Jacobean Court*. Farnham: Ashgate, 2009.
- Gossett, Suzanne, ed. *Thomas Middleton in Context*. Cambridge: CUP, 2011.
- Greenblatt, Stephen. *Marvelous Possessions: The Wonder of the New World*. Oxford: Clarendon Press, 1991.
- . *Shakespearean Negotiations*. Berkeley: University of California Press, 1988.
- Hamrick, Stephen. *The Catholic Imaginary and the Cults of Elizabeth, 1558-1582*. Farnham: Ashgate, 2009.
- James I, King of England. *Basilikon Doron. Or His Majesties Instructions to His Dearest Sonne, Henry the Prince (1603)*. Early English Books Online Editions, ProQuest.
- Lewinsohn, Richard. *A History of Sexual Customs*. Trans. Alexander Mayce. London: Longmans, 1958.
- MacCulloch, Diarmaid. *Reformation: Europe's House Divided 1490-1700*. London: Penguin Books, 2003.
- Marotti, Arthur. *Religious Ideology & Cultural Fantasy: Catholic and Anti-Catholic Discourses in Early Modern England*. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 2005.
- Marshall, Peter, and Alec Ryrie, eds. *The Beginnings of English Protestantism*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.

- Marshall, Peter. *Religious Identities in Henry VIII's England*. Aldershot: Ashgate, 2006.
- Matar, Nabil. *Islam in Britain: 1558-1685*. Cambridge: CUP, 1998.
- McClure, George. *Parlour Games and the Public Life of Women in Renaissance Italy*. Toronto: University of Toronto Press, 2013.
- Middleton, Thomas. *A Game at Chess*. Ed. Gary Taylor. *Thomas Middleton: The Collected Works*. Eds. Gary Taylor and John Lavagnino. Oxford: Clarendon Press, 2010. 1825-1885.
- O'Sullivan, Daniel E., ed. *Chess in the Middle Ages and Early Modern Age: A Fundamental Thought Paradigm of the Premodern World*. Berlin: De Gruyter, 2012.
- Patterson, Serina, ed. *Games and Gaming in Medieval Literature*. New York: Palgrave Macmillan, 2015.
- Rickard, Jane. *Writing the Monarch in Jacobean England: Jonson, Donne, Shakespeare and the Works of King James*. Cambridge: CUP, 2015.
- Rowley, Samuel. *When You See Me, You Know Me*. Ed. Karl Elze. Historical Collection from the British Library, 9.
- Ryrie, Alec. *The Gospel and Henry VIII: Evangelicals in the Early English Reformation*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Shakespeare, William. *The Tempest*. Ed. David Lindley. Cambridge: CUP, 2002.
- *The Tempest*. Eds. Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan. London: Bloomsbury Publishing Plc, 2011.
- Taylor, Gary, and John Lavagnino, eds. *Thomas Middleton: The Collected Works*. Oxford: Clarendon Press, 2010. 1825-1829.

イングランド国教会における説教を巡る対立—ジョン・ダンとウィリアム・ロード—

久野幸子

ジョン・ダンとウィリアム・ロードは、同じ頃生まれ、社会階層も同じ中産階層の鉄商人と織物商人の息子であった。ダンはロンドンのカトリックの家系に生まれたが、長い逡巡の末、1615年イングランド国教会を選んだ。一方、ロードはバークシャー州レディングの国教会の信徒の家に生まれ、1601年から聖職者になり、1625年チャールズ一世即位後、聖職階段を駆け上がる。そして、革命の始まる13年前に59歳で聖ポール大寺院主席司祭として亡くなったダンに対し、1633年からカンタベリー大主教となっていたロードは、約10年間国政に携わるが、1642年、反逆罪に問われ、72歳で処刑された。

本発表では、上記二人の言動を〈説教〉を中心に探り、それぞれが17世紀前半期の英国社会において果たした役割を考えた。ダンは説教者として死ぬまで説教を続けている。ところが、ロードは説教そのものをあまり評価していなかった。1620年代後半から彼は説教の内容を事前審査し、制限する方向に動いている。17世紀四半期、国教会に所属しながら、ピューリタンの傾向をもつ司祭や信徒たちは教会内で自分たちの好む説教をかなり自由に語り、傾聴していたが、1625年以降それを国王とロードによって制限される。そこで、彼らは教会外での説教集会に力を注ぎ、自分たちの政治的・宗教的理想を実現しようとする。これがピューリタン革命の引き金のひとつになった。ダンとロード、二人の神学的立場は同じではなかった。とくに教会内で毎日曜日に行われる司祭による聖務、 sacrament（聖餐と礼拝）と説教、の捉え方は異なっており、その違いは二人の宗教観や生き方とも大きく関係していたと思われる。

国教会はヘンリー8世の「首長令」（1534年）公布とともに始まった。しかし、ローマ・カトリックとプロテスタントとの神学的折衷の機構であったために、独自の神学体系をもたず、理論的には盤石ではない。国教会はエリザベス女王時代までは絶対王政とほぼ共存できたが、ジェームズ一世の時代から共存が難しくなった。当時の国教会の信徒の実態を詳しく見ると、国教会派、中間派、ピューリタン派の3つ、いやそれ以上のグループに分けることができる状態にあった。加えて、国教会には全体として緊張感が欠けており、ロードの主張した国教会の根本的体質改善は確かに急務であった。

ダンとロード、二人の1615年から1627年までの間の直接的関係を示す資料は殆ど残されていない。しかし、ロードは1626年4月から1627年4月までのいずれかの時期に王室礼拝堂の首席司祭に就任していたから、やはり王室礼拝堂付き司祭であったダンの上司であったことになる。ジェームズ一世時代のイングランド国教会はローマ・カトリック教会とは違う。カトリック教会は改革が不十分で、国教会のほうが原始教会に近いというのが、国教会の公式見解であった。ここまでは、ダンもロードも同意見である。しかし、実際は国教会の内部そのものが神学的に分裂しており、また、極めて流動的であった。

説教は本来、国教会正統派にとっても、国教会内ピューリタンにとっても、1640年以後のピューリタンにとっても、重要な聖務であったはずである。そこで、まず、国教会とピューリタンの説教観の違いを概観する。キーワードは3つある。教会と sacrament と説教（聖書の言葉）である。国教会は教会と sacrament と説教、すべてを必要と考えた。ところが、ピューリタンは説教を必要としたが、教会も sacrament も説教ほど必要とは考えていなかったらしい。ここまでのピューリタンの考え方はダンの考え方でもあった。ダンとロードの説教観を比べてみると、かなりな違いがあった。ダンには教会と sacrament と説教のすべてを必要と考え、司祭にとって重要な聖務は、教会での sacrament と説教の両方と考え、聖霊は教会に訪れると考えた。説教が重要なのは、教

会での司祭の説教を通じ、信徒は神からの召命を聖霊の働きによって聞くことが、あるいは聞いたと感ずることができるからである。ダンの神学的立場を一括して説明するのは難しいが、少なくとも、彼はロードが 1620 年代後半、大主教として教会行政に登場する以前は穏健なカルヴァン派であり、キリスト教における分派主義を嫌い、どの宗派に属していようとすべてのひとは同じキリスト教徒であると主張していた。

ダンの説教を約 160 篇後世に残したが、ロードの場合、特定機会説教の 7 篇しか残していない。ロードはダンと同様、当然、教会での司祭の聖務として sacrament も説教も認めていたが、信徒の魂を救うという意味での説教についての言及は彼の著作には殆ど見当たらない。ロードも当然、聖書をもっとも重要なものと考えていたが、教会もまた、重要なものと考えた。そして、司祭の聖務として、sacrament と説教を考えていたが、説教よりも sacrament を重視した。ロードが説教より sacrament を重視した理由の一つは、聖職者が受け取ったとする召命の問題である。ロードの主張は明解である。どのような状況にしろ、生きている人間が召命を受けるはずがない。あるとすれば、精神的興奮状態が各人に召命が下ったと錯覚させるからである。それゆえ、ロードの考える国教会神学では、教会からの聖職任命権を重視するが、個人に対する召命を評価しない。従って説教者による聖書の個人的解釈に基づくような説教も評価しない。ロードは説教を公的な性格を持つものと捉えるので、個人的感情を説教壇で表現すべきではない、と考えた。ロード自身はもちろん敬虔な信仰心を抱いていた。しかし、自分の信仰の悩みについて説教壇で語ることはなかった。一方、ダンやピューリタンたちは自らの信仰の悩みをしばしば語っている。また、ロードは説教者以上に教会と公会議を重んじていたが、ピューリタンたちは良心の自由に基づく聖書の個人的解釈を強く主張していた。

ロードの説教の文章は分かりやすい。論理的で無駄がない。しかし、人間的要素に欠けている。結局、ロードとピューリタンとの違いは、聖書の個人的解釈を許すかどうかであった。ダンとロードと比較すると、ダンも説教者による聖書の個人的解釈を認めたが、ロードはそれを認めず、教会という建物とその機能性にこだわり、説教者ではなく、公会議を重んじた。つまり、ロードにとっては、説教者個人の間人性や考え方などは大して問題ではなかった。極めて真面目で几帳面な人間だったが、説教中に彼自身の個性を示すものを殆ど残していない。

ダンとロード、この二人の直接対立は 1627 年 4 月 1 日に行われたダンの説教の時に起っている。しかしながら、国教会における説教問題そのものは、その 5 年も前、ジェームズ一世の「説教者への指令」 (*Directions to the Preachers*) (1622 年 8 月) が発布され、ダンがこの「指令」の弁護の説教を命じられたときに正式に始まっている。

ジェームズ一世は「説教者への指令」で、説教が扱える主題に大幅な制約を加え、神学上の論争中の諸問題についてふれることを禁じ、説教のテーマを限定し、時間を 2 時間から 1 時間半に削り、

日曜日の午後の説教を禁じている。これはピューリタンへの厳しい締め付けであった。ダンのこの「指令」弁護説教 (IV, 7) はポールズ・クロス説教壇で「指令」の発布 1 か月後におこなわれたが、この降りかかった皮肉な運命に対し、ダンは、全国の国教会説教者たちにこの困難を乗り越え、とにかく説教を続けるように説いている。

1627 年 4 月 1 日、ダンとロードの説教に対する考えが直に対決する事件がおこる。このときの国王チャールズ一世はジェームズ一世とは信仰に対する考え方が大きく異なり、彼はカトリックの、ロードたちの高教会派を歓迎している。彼は、即位直後は、父王同様、ピューリタン派の国教会信徒を懐柔するためにピューリタン派の司祭が説教を国教会内で行うことを認めていたが、この頃から、ロードと組んで、それらを禁止するように方針を変えた。

このような状況のもとで、ダンは問題の説教（聖句は「マルコ伝」4 章 24 節）(VII, 16) を行った。この説教が「説教と説教者についての説教」であることを最初に見破ったのはマカラーだが、確かに、説教という項目を念頭において読んだ場合、問題となる箇所をあちこちで見つけることができる。ダンも結婚後も続く王妃アンリエッタ・マリアのカトリック的信仰生活について穏やかに自重をうながしたあと、「イングランド国教会では、教会そのものがゆれ動いているのだから、信徒がその位置を決められないのは当然である」と述べている。ダンがこの説教で主張したかったのは、まず、現国王に対しては、先王のように神に従う道と王としての統治の道を両立させねばならないこと、そして、信徒は、最終決定は彼個人と神との対話に委ねられているのを知るべきであること、の二つである。この説教でダンも独自のイングランド国教会信徒論を展開している。つまり、イングランド国教会は所詮、折衷（ヴィア・メディア）の教会なのだから、この世で純粹さを達成することは難しく、神の面前で、信徒は個人個人が自らの内面を最後まで守るように諭している。

この説教終了後、ロードを通してダンに「説教原稿を国王に送るように」という命令が伝えられる。そして、ロードは 3 日後の 4 月 4 日の日記に、ダンの国王との会見に彼も同席し、そのあと、ダンの原稿を注意深く読んだ彼自身の行為が国王に認められたという喜びを誇らしげに日記に書いている。ロードはダンに勝ったのである。

確かに王室礼拝堂での聖務として、 sacrament に比べ、説教の価値が相対的に下がったのは事実である。そして、この説教以後、ダンも、宮廷でも聖ポールズ大寺院でもポールズ・クロスでも彼らしい説教をしてはいるものの、ロードと張り合うことはなくなった。ダンも結局、ロードのような御用説教者にはなれなかった、いや、ならなかったのである。

ダンも、どの派に属そうと、どのような神学論争に加わろうと、いや、国王であろうと宮廷人であろうと庶民であろうと、人はすべて神の前では平等であり、神は分け隔だてをなさらない、という信念のもとに説教を続けた。一方、ロードも 1628 年の 6 月から翌年の 1 月までのいずれかの

時期から、彼のいわゆる国政・宗教両面での「徹底政策」を推し進めている。

ダンには神学者でも論争家でもなく、説教者であった。宮廷説教者として、御用説教をしなければならぬ場面に追い込まれても、説教者の本来の役割を忘れまいと努力した。しかし、ロードは信徒各自の魂の問題以上にイングランドと国教会両方の立て直しを願った。彼は弾劾裁判中、自分は国王の言うなりであったと自己弁護したらしいが、聖職者本来の役割を忘れていたため、国王が暴政に走るのを防ぐことができなかつたのである。

イングランドでは、内乱勃発から 20 年後、「信教自由令」(1660 年)が施行され、二人の説教を巡る対立に一応の終止符がうたれた。王政復古後も説教は英国教会の sacrament の一部として残るが、それらの説教は、割り当てられる時間も 15 分から 20 分と短く、20 年前のイングランド国教会での 1 時間半から 2 時間近く続いた説教のように、信徒を自らの信仰に向かい合わせるものではなくなった。しかしながら、説教者ダンの抱き続けた、宗派の違いを超えて全キリスト者が神と向き合うことへの真摯な思いは、現在の英国教会 (Anglican Church) において「世界教会主義運動」(Ecumenicalism) として生き残つたのである。

注 言及したダンの説教は Potter & Simpson ed, *The Sermons of John Donne* による。巻数と番号のみ、丸括弧で示した。

主要参考文献

Donne, John: *The Sermons of John Donne*, ed. George R. Potter and Evelyn M. Simpson, 10 vols. Barkley: Univ. of California Press, 1953-62.

_____, *Sermons Preached at the Court of Charles I*, edited with Introduction by David Colclough, Oxford, OUP., 2013. (The Oxford Edition of the Sermons of John Donne • III)

Laud, William, *The Works*, Vol, I (1847) & II (1849) in one volume, George Olms Verlag Hildesheim, New York, 1977.

_____, *A Relation of the Conference between William Laud, Late Lord Archbishop of Canterbury and Mr. Fisher the Jesuit, by the Command of King James, of Ever Blessed Memory*, Oxford, at the University Press, 1839, Classic Reprint series.

□

Bald, R.C. *John Donne: A Life*, Oxford: OUP, 1970.

Carlton, Charles. *Archbishop William Laud*, London: Routledge & Kegan Paul, 1987.

_____. "The Dream Life of Archbishop Laud", *History Today*, Volume 36 Issue 12 December 1986. 9 – 14.

- Carrithers, Gale, Jr., and James D. Hardy, Jr. *Age of Iron*, Baton Rouge: Louisiana state University Press, 1998.
- Colclough, David, ed. *John Donne's Professional Lives*. Cambridge: D.S. Brewer, 2003.
- Doerksen, Daniel, W. "Polemist or Pastor? Donne and Moderate Calvinist Conformity" *John and the Protestant Reformation*, ed. by Mary Arshagouni Papazian, Wayne State University press, 2003, 12-34.
- _____, *Conforming to the Word, Herbert, Donne and the English Church before Laud*, London, Associated University Press, 1997.
- Fincham, Kenneth ed. *The Early Stuart Church, 1603-1642*, Houndmills, The Macmillan Press LTD, 1993.
- _____. *Prelate as Pastor, The Episcopate of James I*, Oxford: Clarendon, 1990.
- Hunt, Arnold, "English Nation in 1631", *Oxford Handbook of John Donne*, 2011, 634-645. 637.
- Johnson, Jeffrey, *The Theology of John Donne*, Cambridge: D.S. Brewer, 1999.
- Lake, Peter, "The Laudian Style: Uniformity and the Pursuit of the Beauty of Holiness in the 1630s," 161-185, *The Early Stuart Church, 1603-1642*, edited by Kenneth Fincham, Macmillan, 1993.
- McCullough, Peter, "Donne and Andrewes", *John Donne Journal*, Vol.22 (2003).
- _____. "Donne as Preacher at Court: Precarious 'Inthronization'" *John Donne's Professional Lives*, ed. by David Colclough, Cambridge: D.S. Brewer, 2008. 179-204.
- _____. "Donne and Court Chaplaincy", *The Oxford Handbook of John Donne*, 2011, 554-565, 564.
- Norbrook, David, "The Monarch of Wit and the Republic of Letters: Donne's Politics" Elizabeth D. Harvey and Katherine Eisaman Maus eds, *Soliciting Interpretation: Literary Theory and Seventeenth-Century English Poetry*, Chicago: University of Chicago Press, 1990. 3-36.
- Parazian, Mary Arshagouni, ed. *John Donne and Protestant Reformation*, Detroit: Wayne State University Press, 2003.
- Scodel, Joshua, 'The Medium Is the Message: Donne's "Satire 3," "To Sir Henry Wotton" (Sir, more than kisses), and the Ideologies of the Mean'. *Modern Philology*, 90, 1993. 479-511.
- _____. "John Donne and the Religious Politics of the Mean", *John Donne's Religious Imagination*, ed. by Raymond-Jean Frontain and Frances M. Malpezzi, Conway, AR: UCA Press, 1995, 45-80.
- Simpson, Evelen, M. ed. *John Donne's Sermons on the Psalms and Gospels, with a selection of Prayers and Meditations*, Barkley: University of California Press, 1963.
- Tyacke, Nicholas, "Archbishop Laud", *The Early Stuart Church, 1603-1642*, 51-70.

☐

香内三郎 『言論の自由の源流』東京、平凡社選書 45、1976年。

ダーガン、E. 中嶋正昭訳『世界説教史 III 17-18 世紀』東京、教文館、1996 年。

八代 崇 「スチュアート朝英国における教会と国家—ウィリアム・ロードの思想と行動をめぐって—」『桃山学院大学キリスト教論集』4、1968 年。11-50.

テキストとイメージ、モノの饗宴

—17 世紀前半期英国バンケット・トレンチャーの文学的社会的効用

山本 真司

本発表は、16 世紀後半から 17 世紀半ばにかけて英国で独自の発展を遂げたバンケット・トレンチャーに焦点を当て、テキスト/イメージを読み・唄い・贈る余興文化と新大陸交易の勃興を背景に、主に 17 世紀前半期英国バンケット・トレンチャーの文学的社会的効用について考察した。また、社会的効用の定義についてはピエール・ブルデューを援用し、「バンケット・トレンチャー」実践とその意義の研究が、人間の諸行為の客観的規則性と、それら諸行為の体験とを全的内包においてとらえることを目指す独創的方法を作動させる格好の場であり、文学的・社会的用途をその多様性において分析してみればはじめて、それらが可能となる心理的条件という問題を含めた社会的諸条件を明らかにすることを目的とした。

まず、V&A 美術館所蔵の「世界の十二不思議」と名付けられた 12 枚組バンケット・トレンチャーのテキストとイメージを詳細に検討しながら、そこに表現された職業あるいは結婚諷刺を比較分析した。そして、その作者であるサー・ジョン・デイヴィスの「くじ」などのエピグラム作品を取り上げ、「ポーズ」の定義から銘や短詩句、愛唱句などとの関係に注目した。エピグラムの効用としては、ギフトとしての愛誦句の役割を検討し、さらにジョン・ダンの手紙などからフルーツ・トレンチャーの効用を考察した。またテーブル／フェーブルの交換可能性に着目するとともに、芝居における応用例として、シェイクスピア作品におけるバンケットとトレンチャーの用例を検討した。

バンケット・トレンチャーの社会的効用を考察するために、当時の辞書による定義を比較検討したのち、トンド（トンディーノ）／誕生盆／ラウンデルとの関係を歴史的に俯瞰した。一方、その文学的効用については、ギフトとしての Elephant and Castle 像からその解釈の多様性を考察するとともに、トレンチャー記載の格言・意匠として、聖書、寓意、諷刺、エンブレムについても広範に分析した。最後に、エラスムスから新大陸への文化交流の痕跡を辿りながら、聖書やことわざ文化と深い関わりをもつ「テーブル」作法の一種として、宴会とバンケット・トレンチャーによる文学的社会的効用の要点をまとめた。

参考文献

- Bath, Michael. "Emblems from Alciato in Jacobean Trencher Decorations." *Emblematica*, 8.2 (1994): 359-70. Print.
- Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*. Oxford, 1621. Print.
- Davies, John Sir. *The Poems of Sir John Davies*. Eds. Robert Krueger and Ruby Nemser. Oxford: Clarendon Press, 1975. Print.
- Donne, John. *The Poems of John Donne*. Ed. Sir H. J. C. Grierson. London: Oxford UP, 1912. Print.
- Erasmus, Desiderius. *Adages Ivi 1 to Ix100*. Trans. R. A. B. Mynors. Collected Works of Erasmus. Vol.32. Toronto: U of Toronto P, 1989. Print.
- Florio, John. *Queen Anna's New World of Words, Etc. [a Facsimile of the Edition of 1611.]*. Menston: Scholar P, 1968. Print.
- Malay, Jessica L. *Prophecy and Sibylline Imagery in the Renaissance: Shakespeare's Sibyls*. London: Routledge, 2010. Print.
- Maynard, John or, and John Sir Davies. *The Xii Wonders of the World, 1611*. Menston: Scholar P, 1970. Print.
- Olson, Roberta J. M. *The Florentine Tondo*. Oxford: Oxford UP, 2000. Print.
- Puttenham, George. *The Arte of English Poesie*. London, 1589. Print.
- 伊藤博明 『ヘルメスとシビュラのイコノロジー—シエナ大聖堂舗床に見るルネサンス期イタリアのシンクレティズム研究』 ありな書房, 1992.
- 『ヨーロッパ美術における寓意と表象—チェーザレ・リーパ「イコノロジーア」研究』 ありな書房, 2017.
- ブルデュー、ピエール監修, 山縣熙他訳 『写真論: その社会的効用』 法政大学出版局, 1990.